

47 現代の摂丹型民家と白い破風について

山崎敏昭（ひとはく地域研究員）

1 はじめに

摂丹型民家は、近畿地方の旧国摂津北西部、丹波、山城地域に分布する妻入り片土間型式の民家類型である。この民家型式は近畿地方の妻入民家と異なり、広縁、座敷等の「ハレ」の接待空間を前面に配置し格式を重視して成立した類型と評価される。特に入母屋屋根の正面に位置する破風は、住人の格式を表象するものとして重視されている¹⁾。1970年代に同民家類型が規定されて以降、多くの成果が蓄積されているが、類型の特徴とされる破風の全体像が十分に解明されているとは言い難い。

今回の検討は、昨年度に行なった同民家の現代における破風類型を俯瞰したなかで、分布圏の西周縁部に顕著であった、鋼鈑覆い屋根の「白い破風」について、その実態を明らかにし、併せて茅葺民家の継承方法として選択された鋼鈑屋根覆い手法の今後について考察することを目的とする。

2 現代の破風

破風は、切妻屋根や入母屋屋根等の妻側の端面を覆う板（破風板）と妻壁の装飾を兼ねる設えである。草葺民家では、入母屋屋根の妻側の屋根頂部の三角形の開口部を含む²⁾。

そのため、1970年代頃から増加した茅葺き屋根をトタンや各種鋼鈑で覆う形式への変化では、原形の茅葺き屋根を覆い込むことにより、入母屋屋根の妻側端面の螭羽をも破風に取り込む事例も見られ、本来は破風の「縁」であったものが鋼鈑によって大きく強調される事例も増加する傾向が認められる。また、「縁」に相当する破風板部分を白色に塗り分ける事例もみられる。破風板部分を白色に塗分ける例では、螭羽をも破風に取り込み拡張した部分についても白色に塗分け、破風部分を大きく強調する形式も認められる。摂丹型民家にみられるいわゆる「白い破風」である。



Photo 1. 現代の鋼鈑屋根にみる「白い破風」



Fig 1. 摂丹型民家の分布圏

3 現代の鋼鉄葺い屋根を含む茅葺民家の屋根

三田市域の茅葺き民家の悉皆調査では、屋根板金職への聞き取りが行われた³⁾。その研究を参照し、以下に鋼鉄葺い屋根の手法を示す。

一文字葺：横長の鋼鉄等の材料を平置きにし重ねる手法。棟飾りは屋根職により、茅葺の形態を再現して千木・鯉木を乗せる。

菱葺：正方形の材料を菱形に並べ重ねる手法。雪が多い地域では下端を折返し雪止めとする。棟飾りは屋根職により、茅葺の形態を再現して千木・鯉木を乗せる。

波板葺：トタン鋼鉄に代表される波板を縦に用い重ねる手法。安価で普及したが、トタン屋根は腐朽・破損しやすく現存数は少ない。棟飾りは屋根職により、茅葺の形態を再現した千木・鯉木等を乗せる例が多い。

既製品鋼鉄パネル葺：鋼鉄製造会社の既製品を用いた手法である。箱棟風の棟葺いに鬼板を用いる。既に廃盤となっている仕様や、後発の瓦屋根風のパネル仕様がみられる。一文字葺や菱葺よりも廉価であったという。

破風との関係は、一文字葺・菱葺・波板葺については、鋼鉄の破風もみられるが、伝統的な木製破風も使用される。一方、既製品による鋼鉄パネル葺では、破風のほとんどが鋼鉄により覆われ、スヤ（螻羽）部分に拡張される例が多くみられる。



Photo. 2 摂丹型民家の分布圏（三田市域）にみる現代の屋根の種類（文献3）『三田の茅葺民家』に加筆）

屋根材	被覆方法	普及年代	コスト	棟飾	備考、施工者
茅葺	茅葺のまま	近世以来	極めて高額	伝統的棟飾（千木・鯉木・針目縫い等）	伝統技法の継承、専門的屋根職
	波板葺	1960年代～	やや高額	伝統的棟飾（千木・鯉木・針目縫い等）	トタン鋼鉄、屋根板金職
	菱葺	1970年代～	高額	伝統的棟飾（千木・鯉木・針目縫い等）	屋根板金職
	一文字葺	1970年代～	高額	伝統的棟飾（千木・鯉木・針目縫い等）	屋根板金職
	既製品鋼鉄パネルA	1970年代～	安価	鬼板・箱棟	屋根板金職、工務店
	既製品鋼鉄パネルB	1980年代～	安価	鬼板・箱棟	ガリバリウム鋼鉄等、工務店

Table. 1 摂丹型民家の分布圏（三田市域）にみる現代の屋根の仕様（文献3）『三田の茅葺民家』に加筆）

4 対象資料・研究の方法

筆者はかつて、摂丹型民家の破風について、悉皆調査で記録された事例や指定文化財等の保存民家の例を検討し、分布圏東部の口丹波・北摂津能勢地域である大阪府域・京都府域に強調する傾向が顕著である事を指摘した⁴⁾。現代の螭羽にまで拡張した破風を白色に塗り分け強調する事例（いわゆる「白い破風」）が、同民家の分布圏の西縁部である兵庫県域の西摂津地域北部から西丹波地域に顕著であるという結果を、昨年度の「共生のひろば」等において指摘した⁵⁾。

今回の検討では対象として、摂丹型民家の分布圏西縁部（西丹波地域）に位置する丹波篠山市小枕地区と周辺部（旧丹波国多紀郡小枕村）の民家集落における摂丹型民家の外観を調査し、現代の破風の形態や種類、材料について記録し、そのうえで、摂丹型民家の分布圏西縁部にみられる摂丹型民家の「白い破風」の実態をもとに、鋼鈑覆い屋根が普及し始めた現代とそれ以前の近世・近代では、破風を強調する傾向が分布圏の東西で逆転している点、その転換が鋼鈑覆い屋根への更新を契機に生じた変化である点について考察を試みた。

5 破風の詳細—丹波篠山市小枕地区を事例に—

調査地では、6棟の鋼鈑覆いの茅葺民家と多くの瓦葺き摂丹型民家が認められた。鋼鈑覆い屋根の民家は1棟を除く5棟が破風の螭羽までを白く塗る「白い破風」の民家であった。

鋼鈑覆い屋根の詳細は、白い破風の民家は、瓦屋根を模した既製品鋼鈑パネルを使用するものが4棟、平葺き用の既製品鋼鈑パネルを使用するものが1棟、破風を白く塗らない鋼鈑屋根は、正方形の後半を斜めに貼る「菱葺き」方式であった。

また、瓦葺き摂丹型民家については、いずれも破風板を白く塗るか、漆喰で白く塗り込める形式であった。外観からの観察であるが、戦前～戦後の段階に柱替えをして、茅葺屋根から瓦葺きに改築したと考えられる事例もみられ、白い破風は瓦葺き屋根の方が鋼鈑屋根よりも先行するかもしれない。



Photo. 3 西丹波地域（丹波篠山市小枕地区周辺）の事例

7 まとめ・展望 ―白い破風の正体―

摂丹型民家の分布圏である丹波篠山市小枕地区と周辺における「白い破風」の存在形態については、摂丹型民家の特有のものではなく、鋼板葺い屋根の茅葺民家、瓦屋根の民家に共通する状況であった。特に「白い破風」は、既製品鋼板 A と同 B を用いた鋼板葺い屋根に限られており、これら既製品鋼板材におけるデフォルトとして破風部分を白色塗装する「白い破風」が備えられていたと考えられる。

瓦屋根の摂丹型民家の初源は、三田市域に 19 世紀前半の民家普請伺書が残っており、内容を確認すると正方形平面の摂丹型民家の住居であったことが分かる⁶⁾。篠山伝統的建造物群の妻入商家をみると、白漆喰塗りの破風は少数派であり、破風のない商家が多数派であるが、三田市域の城下町や農村部では、破風板の白塗りや白漆喰で塗り込める妻入り民家が多数みられる。

「白い破風」への志向性は、江戸時代後期の三田市域周辺の北摂津地域に認められはじめ、昭和中期までに西丹波地域へと及んだのではないだろうか。その後、1970～90 年代に盛行する既製品鋼板葺い屋根にみる「白い破風」の祖型であった可能性が高い。

8 「白い破風」の今後

現代においては、茅葺屋根の鋼板葺い屋根への改築の事例は極めて少ない状況である。それに伴い鋼板葺い屋根材料のメーカーの葺き材の廃版が行われ、現在の施工例では鋼板屋根 B を見るのみである。また、屋根板金工事を専門とする職人の世代交代も進み、茅葺屋根に鋼板葺いを施工することができる職人も高齢化や施工事例の減少により、ほとんど居なくなっているという。

茅葺き民家の鋼板葺い屋根への施工は 1970 年代から 80 年代に急速に進んだが、施工から約 40～50 年を経過するなかで、鋼材や釘の老朽化により鋼板葺い材の剥落や風水害による飛散・雨漏り被害の危険性が出てきている。メンテナンス費用の負担に加え快適さを求めて、所有者の世代交代を機に取り壊され、ハウスメーカーの新築家屋に更新されていく現状がある。

今日、農村では茅葺屋根の民家はほとんど見られなくなっているが、同時に鋼板葺い屋根民家の減少も進んでいる。農村景観・古民家の保存継承の曲がり角に来ていると考えられる。

【引用・参考文献】

- 1) 永井規男 (1977.01) 「摂丹型民家の形成について」『日本建築学会論文報告集』第 251 号：pp.119-128
- 2) 山崎敏昭 (2019.06) 「9007 摂丹型民家における破風の類型に関する研究―記録された破風にみる近世村落内の階層表現について・摂丹型民家における破風考 (3) ―」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第 59 号計画系：pp.465-468)
- 3) 吉田高子・山崎敏昭編 (2009) 『三田の茅葺き民家』三田市
- 4) 山崎敏昭・黒田龍二 (2014.06) 「9021 摂丹型民家における破風考」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第 54 号：pp.749-752
- 山崎敏昭 (2016.06) 「9005 摂丹型民家の分布圏における破風の大きさ―摂丹型民家における破風考 (2) ―」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第 56 号：pp.557-560
- 5) 山崎敏昭 (2024.06) 「9037 摂丹型民家の破風における意匠の現代的变化―摂丹型民家における破風考 (5) ―」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第 64 号：pp.461-464
- 山崎敏昭 (2024.10) 「摂丹型民家の破風にみる現代的变化の一例」『共生のひろば』第 19 号、pp.62-65
- 6) 史料 305 有馬郡小野村百姓七兵衛「家普請につき伺書」天保 9 年 (1839) 芦屋市住谷家資料、『三田市史』第 4 巻近世資料、三田市 (2006) pp.627

(2025.02.08 出稿)